

# 献辞

人文学部部長  
人間文化学会長 久保克彦

2018年(平成30年)3月末をもって、福永勝也先生がご定年となられ、退任されることとなりました。3年前に、本学部は人間文化学部から人文学部に改組され、そのまだ道半ばにして、福永先生を失うということは、誠に残念でなりません。福永先生には、まだまだお力をお貸しいただきたかったと思います。

福永先生は、1970年に慶應義塾大学経済学部を卒業され、毎日新聞社に入社されました。毎日新聞社では、社会部、経済部、科学部、学芸部の記者を経て、学芸部副部長、経済部編集委員、学芸部部長編集委員などの要職を歴任されました。また、1996年からは、英文毎日(毎日ディリーニューズ)の編集部長や編集局編集委員などの役職も務めておられます。最近、著者がインタビューさせていただいた折には、「学芸部が一番長かったね」と話してくださり、その頃から、本学の人間文化学部におられた岡本健一先生と一緒に仕事をされていたそうです。

学芸部での思い出深い取材は、「太安万侶の墓の発見」であり、一面トップを飾る記事となったそうです。事件記者として社会部で活躍しておられた頃にも、「何本かスクープ記事を書くことができた」と述懐しておられました。

1983年には世界報道研究所(米国)の日本代表研究員に、1994年にはアメリカ国務省文化交流庁(USIA)のメディア招聘フェローを務められるなど、国際的にもご活躍されておられます。その頃、ボリビア革命や大韓航空機撃墜事件やベルリンの壁崩壊など、世界を騒然とさせた事件が福永先生の行く先々で次々と起こり、現場で取材されたそうです。

京都学園大学には、2002年から人間文化学部教授として就任され、ジ

ジャーナリズム論，マスコミ論，グローバル・メディア論，マスコミ文章講座等の授業を担当されました。同時に，図書館長や法人京都学園理事などの役職も務めておられます。学生に向けては，「現代人はネットの影響もあって、『考える』『思考する』という人間的な行為から遠ざかりつつあるような気がします。私たちは民主社会の主権者であるわけですから，私たち自身が様々な社会問題を正しく理解し，判断し，対処してゆかねばなりません。自分のことだけでなく，社会全体(公共)のことを考えることが求められているのです」という言葉を残され，これからの日本を担う若者達に警鐘を鳴らして下さっています。

福永先生の代表的なご著書は，「衰退するジャーナリズム」「こんなアメリカを知っているか」「外交官が見た日本」などがあります。

本文の著者の私が本学に赴任したのは2004年なのですが，不思議なご縁で，それ以前から福永先生を存じ上げておりました。それは，筆者が毎日新聞の永年の購読者であり，研究テーマが「糖尿病患者への心理的援助」であったことに関係しています。ある時，毎日新聞に，糖尿病の健康セミナーの案内記事が掲載されており，その司会者として立派な口髭を生やした人の写真が印象に残ったのですが，その人こそが福永先生であったのです。インタビューの際に，福永先生に「その口髭はいつから生やしておられるのですか」と伺いますと，「髭を剃った時期もあったが，学生時代から生やしている」とのことでした。その理由を尋ねますと，「日本人の顔は平坦なので，外国人と張り合う際には髭が必要だったことと，早くから葉巻を吸ったりして，自分の個性を主張したかった」とのお話でした。このような福永先生の国際性につきましては，京都学園大学の退任後には，パリのセカンドハウスに住まれるという話からも十分窺い知れることでもあります。

最後に，今ここで，福永先生をお送りしなければならないのは，誠に残念なことではあるのですが，これまでの福永先生の京都学園大学へのご尽力に感謝の言葉を申し上げ，先生の今後ますますのご健勝とご活躍をお祈りいたします。